ダブルダッチパフォーマンス指導者に求められる資質・能力の明示化に向けて

―指導過程に関する質的・量的アプローチを通して―

北原　和明

（岡山理科大学教育学部）

アメリカを発祥とするダブルダッチが日本に紹介されてから、およそ40年が経過し、今やダブルダッチは幼児から社会人にいたるまで幅広い年齢層で愛好されるようになった。この間、大学生プレーヤーを中心に様々なオリジナルの技術が開発され、日本人チームは各種の世界大会において、優秀な成績を修めている。このような現象を支えているのは、様々な経歴をもつダブルダッチ指導者であることは言うまでもないが、彼らの指導メソッド等が如何にして生成されてきたかについての論考は見当たらない。

本稿では、短期間のうちに初心者のみによるキッズチームが大会ルールに即したパフォーマンスを完成させた事例に注目し、その指導者のライフヒストリーについて質的分析を試みた。分析の結果、指導者の学歴・職歴・ダブルダッチ歴が関連し、独自の指導哲学が生成され、これによって固有の指導メソッドが確立されたことが示唆された。さらに、指導哲学から指導メソッドを抽出することで、一般的尺度による指導スタイルの評価が可能になった。この知見は、未だ暗黙的な実践の域を出ないダブルダッチ指導者の資質・能力の明示化に向けた試金石を得るための第一歩となるものである。

キーワード：ダブルダッチ、資質・能力、指導哲学、ライフヒストリー、キッズチーム

1. 緒言

1.1. 研究の背景

スポーツ指導者に求められる資質・能力について、マートン（2013）は「指導者として成功するには、人生哲学と指導者としての確立した哲学が良き友となる」（マートン，2013，p.11）と述べており、スポーツ指導における指導哲学の重要性を指摘している。また、青山（2017）は国際コーチングエクセレンス評議会、日本体育協会等の指導モデルを概観し、現代のスポーツ指導者に求められる専門的知識の検討をしている。その結果、スポーツ指導者には自然科学によって得られる知識だけでなく、人間科学によって得られる知識が必要であるとしている（青山，2017，p.57）。これらの論考は、今後広がりを見せるであろうダブルダッチをはじめとするニュースポーツの指導者にも、独自の指導哲学が求められることを示唆するものである。また、一般的なスポーツ指導者に求められる資質・能力を明らかにする上でも価値ある検討課題であると考える。

ダブルダッチは2本のロープを使って跳ぶ縄跳びである。日本ジャンプロープ連合によると、「IJRU WORLD CHAMPIONSHIPS[1]」をはじめとする国際大会において日本人プレーヤーの技術は高く評価され、各大会において好成績を収めている。アメリカ由来のこのスポーツにおいて、日本人プレーヤーが高く評価される所以についての論考は見当たらないが、実際に国際大会に参加した日本人プレーヤーの言によると、「外国人はあまり練習をしない」という。換言すれば、日本人の勤勉な競技姿勢が好成績の所以であり、ダブルダッチだけでなく日本のスポーツ教育の成果をシンボリックに表したものと言えよう。

ダブルダッチが本格的に日本に導入されてから、およそ40年が経過した。導入当時から2本のロープを巧みに操りながら魅せるダンス的なパフォーマンスは、ダブルダッチを象徴する存在であったが、このパフォーマンスを

行えるチームは数少なく、特別なプレーヤーによる特別な能力の発揮であった感は否めない。その後、日本のダブルダッチ人口は増え続け、各種大会、イベントの開催によって。パフォーマンスを披露できるチーム（以下：パフォーマンスチーム）は増加した。かつてパフォーマンスチームは大学生を中心としたメンバーによるものであったが、今や高校生のみならず、中学生、小学生のみによるチームも数多く見られるようになった。ダブルダッチのパフォーマンスは本来自由な発想をもとに創作されるものであり、必ずしも一定の身体能力を要するものではない。しかし、表現要素が強いダブルダッチのパフォーマンスにより、家族、仲間といった特定の属性をもたないオーディエンスを魅了することは、誰もが容易くできるものではないことは想像に難くない。

一般的なオーディエンスを魅了するだけのパフォーマンスを創り上げるには、チーム固有の練習メソッドが必要であり、固有のメソッドの交流によって、現在、多様な属性をもつプレーヤーがパフォーマンスを創作している。また、今日ダブルダッチのパフォーマーが社会人・大学生のみならず、小中学生にも広がっている背景には有能な指導者の存在があると推察できる。

1.2. ダブルダッチパフォーマンス指導についての先行研究

ダブルダッチの指導方法について平野（2006）は、指導者として定評のある林恒明の指導メソッドが有効であることの証明を目的に、ダブルダッチ未経験の小学 6 年生に対しての 2 時間の授業分析を行っている。指導者の適切な介入、すなわち、「⑴児童の相互学習の場面を設定する。⑵技術指導はスモールステップによる。⑶教師は発見誘導型の授業形態をとる。」（平野，2006，p. 43）の 3 つの指導メソッドによって、2 時間の授業で児童が成果を実感し、ダブルダッチの初期課題が解決されることを報告している。

渡辺（2015）は、ダブルダッチのもっとも単純な跳び方はロープに入る・跳ぶ・出るであるとし、この過程で発生する 3 歩のリズムの動き方が、中核となる運動感覚であるとしている。指導面ではロープに引っ掛からずに跳ぶためのコツとロープの動きを読み取るためのカンを同時に働かせる「コツとカンの絡み合い」（渡辺，2015，p. 5）に着目し、跳ぶためのスモールステップに 8 種のアナロゴンを提案している。

長沼（2017）は、小学 6 年生を対象に、1 本長縄のかぶりなわとむかえなわに入るタイミングをつかむことから始め、2 本の縄に入って連続して跳び、出るまでの過程を実践している。指導の観点としては、なじみのある動きから始めて 2 本の縄に入る・跳ぶ・出るという一連の動きの感じを積ませ、その上で左右両側の動きの感じをつかませることの有効性を報告している（長沼，2017，p. 156）。

これらの研究成果は、ダブルダッチの初期課題への対応を主な対象としており、「できる」ことが主眼となっていると観ることができる。このことはダブルダッチの初期課題である「入る・跳ぶ・出る」ことの難易度の高さを示すものであると言える。一方で、より多くの回数を跳ぶことを中心にしたゲームとして完結してしまう傾向が見て取れるのである。

一方でダブルダッチのパフォーマンス指導に関する研究では、萩原（2019）が小学校体育科授業に創作ダブルダッチを取り入れた実践報告を行っている。ここで取り上げられているパフォーマンスは、「「3 人で跳ぶ」「2 人同時に入る・出る」「回して手が回転」「回し手の交代」「馬とびをしながら入る」「跳びながらジャンケン」等」（荻原, 2019, p. 44）の基本的な技で構成されており、観客に対して魅せることを主目的にしたものというよりは、パフォーマンスの創作過程に学校教育で求められる資質・能力の育成を求めたものであった。

1.3. 研究の目的

上記の通り、ダブルダッチパフォーマンスに関する研究は主に学校における初期課題の解決を対象としたものである。一方で、ダブルダッチプレーヤーの広がりに伴って、今や国内に多数のダブルダッチ指導者が存在し、各々が固有の指導メソッドを確立しているものと推察される。しかし、現在、ダブルダッチの専門指導者にどのような資質・能力が求められるかについて直に論考している研究は見当たらない。従って，指導者が個々に保有している指導メソッドと指導哲学との関連についての論考も見られない。そこで、指導者が個々に保有している指導メソッドと指導哲学を明示化し、自らの指導スタイルを省察できることが、指導者に求められる資質・能力の一つと言えるのではないか。

本研究では、暗黙的な指導者の指導哲学を明示化し、指導者固有の指導メソッドを抽出して指導スタイルを評価

することを試みる。この事例を基に、指導者に求められる資質・能力の明示化に向けた試金石作成の端緒を得ることが本研究の目的である。

2. 研究の方法

本研究では、ダブルダッチ初心者の小学生3名が短期間のうちにパフォーマンスを完成させた事例について、指導者から提供された指導記録及びパフォーマンス構成、さらに、指導者のライフヒストリーについての聴き取り内容を分析し、指導者のもつ指導哲学と指導メソッドの抽出を試みる。さらに指導哲学と指導メソッドを質的・量的の両面から照らし合わせ、調査対象とした指導者の指導スタイルを明らかにしていく。最後に、一般的なスポーツ指導スタイルについての論考と本研究の分析結果を照らし合わせ、指導スタイルの評価を試みる。

2.1. 研究の対象者

①小学生ダブルダッチチーム（SC）

小学生3名によるパフォーマンスチームである。A児はダブルダッチベーシックジャンプを習得している状態でスタートしている。B児はA児と同学年であるが、ダブルダッチの経験はない状態でスタートしている。C児はA児・B児の3学年下の最年少児である。ダブルダッチの経験はない状態でスタートしている。

②指導者Y氏

O県在住の一般社会人である。同県内の大学在籍時にダブルダッチサークル（JC）に所属しダブルダッチを始める。在学中にダブルダッチの大会に出場。地方予選において入賞を果たしている。当時のJCは大学祭でのパフォーマンスが主な活動であり、大会に出場するチームの数は限られていた。大学卒業後は数年間ダブルダッチから遠ざかるが、社会人チームを結成しO県のトップチームの一員となる。県内のダブルダッチ普及活動を進めながら、ダブルダッチの指導を行っている。

4名の対象者には調査に先立ち研究の主旨を説明し、口頭及び文書で調査協力を依頼して了承を得た。

2.2. 分析の方法と対象

対象とするテクストは、Y氏へのインタビュー記録、SCがダブルダッチの大会でパフォーマンスを披露するまでの指導記録、パフォーマンス構成とした。

パフォーマンス構成は前提として、完成させたパフォーマンスが一般的ダブルダッチパフォーマンスとしての評価に値するものであるかを検証するために用いた。

Y氏へのインタビューには、Y氏の指導哲学は同氏のダブルダッチに関わるライフヒストリーの語りの中に表れると考え、ナラティブ・インタビューを用いた。ナラティブ生成質問は『ダブルダッチとの出会いからSCが演技を完成させるまでの過程を振り返って、ご自身のライフヒストリーがどのように関わっているのでしょうか』とした。インタビュー記録の質的分析方法にはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いた。

インタビュー記録と指導記録からは、テキストマイニングによって指導メソッドを抽出し、Y氏の指導メソッドを分類した。さらに、各メソッドの出現頻度、出現箇所についてχ^2検定を用いて指導メソッドの偏りを調べた。

最後にインタビューの質的分析によるモデルに指導記録の量的分析結果を照らし合わせ、Y氏の指導スタイルを明らかにすることにした。

3. 結果

3.1. Y氏が提供したパフォーマンス構成

SCのパフォーマンス構成はプレーヤー自身が創作したものではなく、指導者であるY氏から提供されたものである。Y氏は冒頭で構成作成の大きな意図を以下のように述べている。

前提：パフォーマンス未経験、かつ3人メンバーで常にターナー/ジャンパー立ち位置となるため、【A】リスクヘッジを行い、【B】ハキリ（原文ママ）[2]とした節目節目となる構成を心がけた。節目節目となる構成：見せ場が分かりやすく【C】、

仮にミスが起こっても切替を行いやすい。抽象的に言うところの、「わかりやすく、無理をしない構成」としている。【B】
ただし、全てが背伸びをしない構成としたわけではなく、沸きどころも用意している。【C】
構成の流れとしては　ダンス→リズムステップ 1→フロアアクロバット（沸き 1）→リズムステップ 2→ロープトリック 1（エアロープ）（沸き 2）→エアアクロバット（沸き 3）→ロープトリック 2→ハリーステップ→締め
練習プロセス中に、構成の難易度の高い箇所を簡易化させていくことを前提として開始。【D】

（【A】～【D】は筆者）

この記述には【A】対象者の実態把握、【B】わかりやすく、無理をしない構成、【C】観客に魅せるための「湧きどころ」の用意、【D】構成の難易度の高い箇所を簡易化させていくという 4 種類の方針が見られる。

【B】と【C】は相反する関係にあり、あくまでも実現可能な範囲での結果を求める Y 氏の指導方針が伺える。しかし、最終的に求めるものは高い結果であり、【C】はそのための視点と捉えることができる。【D】は具体的な方策にあたるものであり、基本的には高位から低位への修正を予定するものである。したがって【A】には客観視を基本とした確かな見取りが必要とされる。

Y 氏の提供する構成は観客を沸かせるという要素と、それに伴う一定のリスクを内包したものであることが伺える。つまり、本構成はダブルダッチパフォーマンスとして必要最小限の要素は担保されていると言える。

上記の構成を SC は本番のステージでミスなく演じきっている。原（2022）は、ゲームとして成立するスポーツの本質的課題を、前提的条件と構成的ルールからなる挑戦課題であるとし、その下でプレーヤーは内部的目標を個別に設定しているとしている（原，2022，p.25）。ダブルダッチの前提的目標をミスなく跳び続けること、構成的ルールをターナーとジャンパーで構成されたチームで 2 本以上のロープを用いることとした場合、ダブルダッチのパフォーマンスを行ってオーディエンスを沸かせるという内部的目標の下であっても、ミスなくパフォーマンスを終えることができることはプレーヤーの本質的課題として位置づく。SC が本番のステージでミスなくパフォーマンスを終えられたことは、SC のパフォ―マンスが評価されるに十分なものであったと考える。

3.2. インタビュー調査

Y 氏へのインタビューからは発言内容が 168 抽出され、コード数 45 にまとめられた。45 のコードは 9 サブカテゴリ、3 カテゴリに集約された。カテゴリを【】、サブカテゴリを『』、コードを＜＞で示した。3 カテゴリは【ダブルダッチ観】【自分観】【指導観】と命名した。

3.2.1. ダブルダッチ観

【ダブルダッチ観】カテゴリでは『競技歴』『チーム変遷』『競技実績』という 3 つのサブカテゴリが抽出された（表 1）。

『競技歴』には＜競技歴の通算＞＜大会への出場＞＜活動期間と休止期間＞＜イベントへの出場＞＜練習を続ける必要感＞の 5 種類のコードが抽出された。ここでは、Y 氏が 14 年間の活動歴の中で出場してきたダブルダッチ大会とイベントの概要と、これに向けての練習の概要が整理されていた。注目されることは就職により活動拠点であった 0 市から離れた期間があり、この期間中は活動を一時休止していたことである。活動再開後は自身の身体能力の変化と関連付けて練習を続ける必要感が語られている。

『チーム変遷』には＜学生チーム「S」＞＜社会人チーム「C」＞＜社会人チーム「MN」＞＜社会人サークル「大人ダブルダッチ 0」＞の 4 種類のコードが抽出された。ここでは、Y 氏が所属してきたダブルダッチチームの変遷について、立ち上げの経緯とそれぞれのチームの中での自身の位置づけが整理されている。前述の『競技歴』サブカテゴリをチームという背景から語った内容であるとも言える。

『競技実績』には＜デライトの成績＞＜コンテストの成績＞＜0 チャレンジでの成績＞の 3 種類のコードが抽出された。ここでは、大会規模・レベルを異にする大会での競技成績が整理されている。ダブルダッチデライト（南地区大会）は事実上 0 県内のローカル大会である。一方で、ダブルダッチコンテストについてのテクストには「2015 年にワールド世界大会予選のファイナリストに残る。これは 0 県出身のチームでの快挙として、歴史が刻まれた瞬間っていう形ですね」とあり、県内トップであることだけに満足をしていないことが伺える。また、0 チャレンジの「パフォーマンスのパクリよりもダブルダッチチャレンジの運営だとか」というテクストが同時に見られること

から、大会運営との関連で成績を捉えていることが伺える。

表 1 ダブルダッチ観

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
ダブルダッチ観	競技歴	競技歴の通算
		大会への出場
		活動期間と休止期間
		イベントへの出場
		練習を続ける必要感
	チーム変遷	学生チーム「S」
		社会人チーム「C」
		社会人チーム「MN」
		社会人サークル「大人ダブルダッチ O」
	競技実績	デライトの成績
		コンテストの成績
		O チャレンジでの成績

3.2.2. 自分観

【自分観】カテゴリでは『職歴』『競技観』『自己認識』という 3 つのサブカテゴリが抽出された（表 2）。

『職歴』には<A 社での仕事>＜B 社での仕事>＜現職での仕事>の 3 種類のコードが抽出された。Y 氏は大学卒業後 2 回の転職を経て現職に至っている。ここでは、エンジニア系の業務とコンサルティング業務を行き来したことが語られている。その底流には常に自己実現を求める Y 氏の気質が伺える。また、最初に教育関連企業への就職を果たし、コンサルティングを通して人間そのものへの興味を深めたという語りにあるように、人との関わりを好む気質が伺える。

『競技観』には<パフォーマンスとは何かという問い>＜パフォーマンスを通した自己実現欲求>＜将来への展望>の 3 種類のコードが抽出された。ここでは、「やっぱり人前に出て拍手をもらうっていう人生一度しかないことを何度も経験させてもらえる。ただしこれは、永遠ではないということを深く考えるようになり、自分自身が選手生命的にも、老人になってもできるか、もちろん目指すんですけども、そこについても考えるようになってきて」というテクストが語るように、ダブルダッチパフォーマンスに対して自問自答を繰り返す中で自身のダブルダッチ論が形成された経緯を自覚していく姿が語られている。

『自己認識』には<段階的思考を好むことの自覚>＜職人気質の自覚>＜得意・不得意の自覚>＜自己努力の結果の自覚>＜自己有能観の自覚>＜知の共有への欲求>＜子ども指導へのマインド>の 7 種類のコードが抽出された。ここでは、「悪く言うと器用貧乏なんですよ」「けど記憶も逆にいいんですけど」という短いテクストから伺えるように自己を冷静に分析できることへの自覚が語られている。また、多くの試行錯誤による経験の蓄積と、他者への発信を好む気質を肯定的に捉えるようになったことが語られている。Y 氏が苦手意識のあった子どもの指導に向かうようになった所以は、このように自己を認識してきた過程にあったことが伺える。

表 2 自分観

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
自分観	職歴	A 社での仕事
		B 社での仕事
		現職での仕事
	競技観	パフォーマンスとは何かという問い
		パフォーマンスを通した自己実現欲求
		将来への展望
	自己認識	段階的思考を好むことの自覚
		職人気質の自覚
		得意・不得意の自覚
		自己努力の結果の自覚
		自己有能観の自覚
		知の共有への欲求
		子ども指導へのマインド

3.2.3. 指導観

【指導観】カテゴリでは『指導歴』『プレーヤーの分析』『指導に対する関心と開発した指導法』という 3 つのサブカテゴリが抽出された（表 3）。

『指導歴』には＜学生に対する先駆的な指導＞＜「M」との出会い＞＜「P」 への指導＞＜大人への指導法の確立過程＞＜「SC」への指導＞＜指導による DD 観の確立＞の 6 種類のコードが抽出された。ここでは、本稿の中心的な検証対象である SC への指導に至る経緯が整理されている。Y 氏の指導対象は、自身が所属した学生サークルから県外の社会人チームへと広がっている。内部から外部、同世代から異世代へと指導対象者の幅を広げてきた Y 氏が、2020 年から子どもへの指導を行うようになる。Y 氏の指導歴を概観すると、自身が経験してきたことを足掛かりに、着実なステップアップを遂げていることが伺える。SC への指導はその結果と言えよう。

『プレーヤーの分析』には＜学生プレーヤーの実態＞＜O 県プレーヤーへの思い＞＜子ども指導へのマインド＞＜「SC」メンバーの実態＞＜Y 氏の指導者論＞の 5 種類のコードが抽出された。ここでは、Y 氏とダブルダッチとの関わりが自身も含めた人の分析の側面から語られている。SC は Y 氏が関わった人々の中で唯一のキッズプレーヤーである。＜子ども指導へのマインド＞のなかで「それから子どもに対しての固定観念が変わってきます、相手は言語が足りないだけで考えてることっていうのは意外と大人なんだなって言う」「で実際、子どもと関わるように、毎週行ってたんで、毎週子どもと関わるようになって、この人たちも子どもの皮を被った大人なんだなということに気付き始めました」と語っているように、キッズプレーヤーを大人と同じレベルでダブルダッチに関わることができる存在であると捉えている。

『指導に対する関心と開発した指導法』には、＜スキル動画の作成と提供＞＜スモールステップへの気づき＞＜見ることの指導＞＜ケース指導バリエーションへの気づき＞＜指導についての自信の獲得＞の 5 種類のコードが抽出された。ここでは、前述の指導歴のなかで Y 氏が獲得してきた指導方法の詳細と指導哲学が語られている。

＜スキル動画の作成と提供＞＜見ることの指導＞は Y 氏の指導方法を特徴づけるものである。Y 氏の指導は視覚による身体コントロールを重視する。Y 氏は「見ていいんだよ、これもよく言うんですけど、見ちゃダメなんだよって誰も言ってないんだよ、基本的に見ないようにしようとする人たちが多くて不思議なもんで」「ズルをするわけじゃないんですけど正攻法だよっていう」と語るように、視覚によるコントロールの有用性を説くのである。＜ケース指導バリエーションへの気づき＞には、指導対象者の特性とニーズへの共感的理解が伺える。一方で、＜指導についての自信の獲得＞で「私自身の裏の目的としては、自分のアウトプット」と語るように、Y 氏は指導対象者の求める結果に寄り添うマインドをもちつつも、自身の成長を指導のエビデンスとすることにより、指導者としての自信を獲得していったことが伺える。

表 3 指導観

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
指導観	指導歴	学生に対する先駆的な指導
		「M」との出会い
		「P」への指導
		大人への指導法の確立過程
		「SC」への指導
		指導による DD 観の確立
	プレーヤーの分析	学生プレーヤーの実態
		O 県プレーヤーへの思い
		子ども指導へのマインド
		「SC」メンバーの実態
		Y 氏の指導者論
	指導に対する関心と開発した指導法導法	スキル動画の作成と提供
		スモールステップへの気づき
		見ることの指導
		ケース指導バリエーションへの気づき
		指導についての自信の獲得

3.3. Y 氏の指導哲学モデル

前述の 3 カテゴリと 9 サブカテゴリについて相互の関連を明らかにすることにしたい。まず、各カテゴリにお

けるサブカテゴリの関連を検討する。その上でカテゴリ間の関連を明らかにし、Y 氏の指導哲学の構造化を試みる。

3.3.1. 各カテゴリ内におけるサブカテゴリの関連

自分観におけるサブカテゴリの中で『職歴』と『競技観』に直接の関連は見られなかった。一方で『自己認識』については『職歴』と『競技観』双方からの関連が確認できた。つまり Y 氏の【自分観】は『職歴』と『競技観』によって『自己認識』として表出されていることが伺える。

【ダブルダッチ観】におけるサブカテゴリの中では、『競技歴』と『チーム変遷』について相互作用の関連が見られた。そして、この双方からは『競技実績』への関連が見られた。つまり Y 氏の【ダブルダッチ観】は『競技歴』と『チーム変遷』が相互作用する中で『競技実績』として表出されていることが伺える。

【指導観】におけるサブカテゴリの中では、『指導歴』から『プレーヤーの分析』への関連が見られた。そして、この双方から『指導に対する関心と開発した指導法』への関連が見られた。つまり、Y 氏の【指導観】は『指導歴』そのものと『指導歴』を基にした『プレーヤーの分析』とによって『指導に対する関心と開発した指導法』として表出されていることが伺える。

3.3.2. 各カテゴリ間の関連

【ダブルダッチ観】内の各サブカテゴリはいずれも競技に関連するものであり、これは【自分観】内の『競技観』との関連が伺える。この関係は競技を指導対象とした Y 氏の指導観全体にも同様の影響を与えていることが伺える。一方で、【自分観】における『自己認識』は【指導観】における『指導歴』と直接の関連が見られた。つまり、競技者として培われた【ダブルダッチ観】を原点に【自分観】を交えて【指導観】へとつながっていくというストーリーラインが描かれているのである。このストーリーラインは Y 氏のダブルダッチ哲学を形作るものであり、【ダブルダッチ観】と【自分観】という潜在的な哲学からより顕在的な哲学として【指導観】が浮かび上がっているという構造をなしている。（図 1）

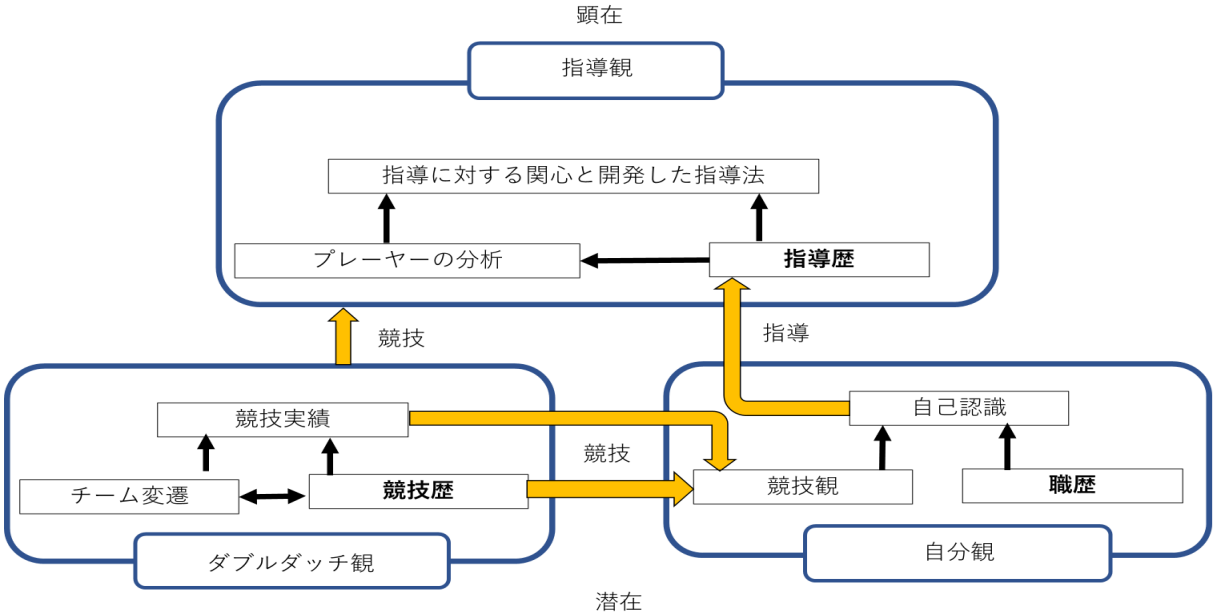

図 1 Y 氏のダブルダッチ哲学モデル

3.4. 指導メソッドの抽出と分析

3.4.1. インタビュー記録からの抽出

Y 氏のナラティブ・インタビューの中には、Y 氏が実際に指導に用いている指導メソッドについての語りが見られる。そこで、GTA に用いたテクストについて指導メソッドの視点から再度コーディングを試みた。その結果、①

パフォーマーマインド、②チームマインド、③見る論（Y 氏自身による）、④視覚支援、⑤掛け声、⑥個別最適指導の 6 種類のメソッドが抽出された。各メソッドが Y 氏の指導哲学からどのように生成されているのかを明らかにするために、各メソッドが指導哲学におけるどのサブカテゴリから抽出されたのかを、根拠となるテクストとともに表 4 に示した。

表 4 指導メソッドとサブカテゴリとの対応

指導メソッド	主なテクスト	抽出元のサブカテゴリ
①パフォーマーマインド	「パフォーマンスって何だったんだ」	『自己認識』
②チームマインド	「0 県出身のチームでの快挙」	『競技実績』
③見る論	「見る指導というか」	『指導に対する関心と開発した指導法』
④視覚支援	「動画を公開しながら」	『指導歴』
⑤掛け声	「プレーヤー同士の声掛けが途切れることがない」	『プレーヤーの分析』
⑥個別最適指導	「個人を見ないと分かんないよね」	『指導に対する関心と開発した指導法』

3.4.2. 指導記録の分析

前節で抽出した 6 種類のメソッドについて、指導記録のテキストマインニングを行い、各指導段階における出現数の偏りを調べた。SC への指導は 2022 年 4 月 14 日から同年 8 月 28 日までの、およそ 5 か月半に渡っている。この内、パフォーマンス当日を除く 40 回を分析の対象とした。Y 氏は 40 回の内、1 回から 8 回までを導入段階（ステップ 1）、9 回から 15 回までをマインドセットの段階（ステップ 2）、16 回から 27 回までを基礎固めの段階（ステップ 3）、28 回から 30 回までをプレ発表によるマインドセットの段階（ステップ 4）、31 回から 35 回までを自立・能動性を高める段階（ステップ 5）、36 回から 40 回までを発表マインドを高める段階（ステップ 6）と位置付けている。さらにステップ 1・2 をⅠ段階、ステップ 3・4 をⅡ段階、ステップ 5・6 をⅢ段階にまとめている。

表 5 に各段階における 7 種類の指導メソッドについて出現数（割合）を示す。また、以下に各メソッドの分析について詳細を示す。

表 5 レッスン過程における指導メソッドの出現

	①PM	②TM	③見る論	④視覚支援	⑤掛け声	⑥個別最適指導
Ⅰ段階	3 (50%)	6 (75%)	18 (62%)	4 (57%)	3 (38%)	64 (39%)
Ⅱ段階	1 (17%)	0 (0%)	11 (38%)	3 (43%)	3 (38%)	56 (34%)
Ⅲ段階	2 (33%)	2 (25%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (25%)	45 (27%)
合計	6	8	29	7	8	165

①パフォーマーマインドは、練習中もパフォーマンス中もオーディエンスを意識するように働きかけるメソッドである。①の抽出語として「観客」「ステージ」「パフォーマー」の 3 種類を用いた。全ての記述のうち出現数は 6 であった。出現した指導日についてはⅠ段階で 50%、Ⅱ段階で 17%、Ⅲ段階で 33%が見られた。段階の出現数に統計的な有意差は見られなかった。Y 氏の指導メソッドの根底をなしていることが伺える。

②チームマインドは①パフォーマーマインドと同様に人を意識するように働きかけるメソッドである。②の抽出語として「チーム（全員で）」「相手（みんな）」「義理」の 3 種類を用いた。全ての記述のうち出現数は 8 であった。出現した指導日についてはⅠ段階で 75%、Ⅱ段階で 0%、Ⅲ段階で 25%が見られた。各段階の出現数に統計的な有意差は見られなかったが、Ⅰ段階で多く現れる傾向が見られた。Ⅲ段階では統計的に有意とは言えないが、チームマインドを高めるとの記述が見られ、初期に重点的に高めてきたチームマインドを発表前に再度高める意図が伺える。

③見る論はＹ氏がプレーヤーにロープを見るように働きかけるメソッドである。③の抽出語として「目視」「見る」の２種類を用いた。全ての記述のうち出現数は 29 であった。出現した指導日についてはⅠ段階で 62%、Ⅱ段階で 38%が見られた。Ⅰ・Ⅱ段階の出現数は有意に多く、初期から中期にかけて重視されているメソッドであると言える。（表 6）

表 6 ③見る論の出現頻度

比較	臨界比	検定	名義水準
Ⅰ段階 = Ⅱ段階	1.11	ns p>.05	0.03333
Ⅰ段階 > Ⅲ段階	4.01	* p<0.0002	0.01667
Ⅱ段階 > Ⅲ段階	3.02	* p=0.0026	0.03333

④視覚支援は、Ｙ氏が遠隔地のチームに対して行ってきた指導から導き出されたメソッドである。④の抽出語として「動画」「映像」の２種類を用いた。全ての記述のうち出現数は７であった。出現した指導日についてはⅠ段階 57%、Ⅱ段階で 43%が見られた。Ⅲ段階は 0%であった。各段階の出現数に統計的な有意差は見られなかった。動画によるフィードバックは全ての回において行われていることから、Ⅲ段階で抽出語が見られなくなったのは、より前提的に実施されたものと推察される。

⑤掛け声は、パフォーマンス中にカウントを数えるだけでなく、プレーヤー同士が指示を出し合うように働きかけるメソッドである。⑤の抽出語として「声（を）掛け（あい）」「掛け声」の３種類を用いた。全ての記述のうち出現数は８であった。出現した指導日についてはⅠ段階で 38%、Ⅱ段階で 38%、Ⅲ段階で 25%が見られた。各段階の出現数に統計的な有意差は見られなかった。①と同様にどの段階でも偏りなく実施されており、メンバー間のコミュニケーションを重視する意図が伺える。

⑥個別最適指導は、プレーヤー個々の課題に応じた指導を行うことである。⑥の抽出語として指導対象者の個人名を用いた。全ての記述のうち出現数は 165 であった。出現した指導日についてはⅠ段階で 39%、Ⅱ段階で 34%、Ⅲ段階で 27%が見られた。各段階の出現数に統計的な有意差は見られなかった。対象者個別の出現回数については、A 児が 45、B 児が 49、C 児が 71 であった。全期を通して対象者間の出現回数では C 児に対する指導が有意に多かった。前述の通り C 児は他の対象者よりも年少であり、個に対して最適に対応した結果であると推察される。（表 7）

表 7 対象者個人間の指導回数差

比較	臨界比	検定	名義水準
A 児 = B 児	0.31	ns p>.05	0.03333
A 時 < C 児	2.65	* p=0.008	0.01667
B 児 < C 児	2.25	* p=0.0244	0.03333

3.4.3. 指導哲学と指導メソッドからなるＹ氏の指導スタイル

前述の通りＹ氏のダブルダッチ哲学モデルは潜在的な側面と顕在的側面の両面性をもっている。そこで、抽出したＹ氏の指導メソッドが指導哲学における主にどのサブカテゴリから抽出されているのかを確かめた。その結果、Ｙ氏のダブルダッチ哲学における潜在的側面である【ダブルダッチ観】と【自分観】からは①パフォーマーマインド、②チームマインドが抽出されていた。一方で、顕在的側面である【指導観】には③見る論、④視覚支援、⑤掛け声、⑥個別最適指導といった、より直接的な技能指導に関するメソッドが抽出されていた。（図 2）

このように、Ｙ氏は潜在的にマインドの育成を行い、ダブルダッチ技術のメカニズムを視覚的・聴覚的に顕在化させて個別最適指導を行うという指導スタイルをとっているのである。

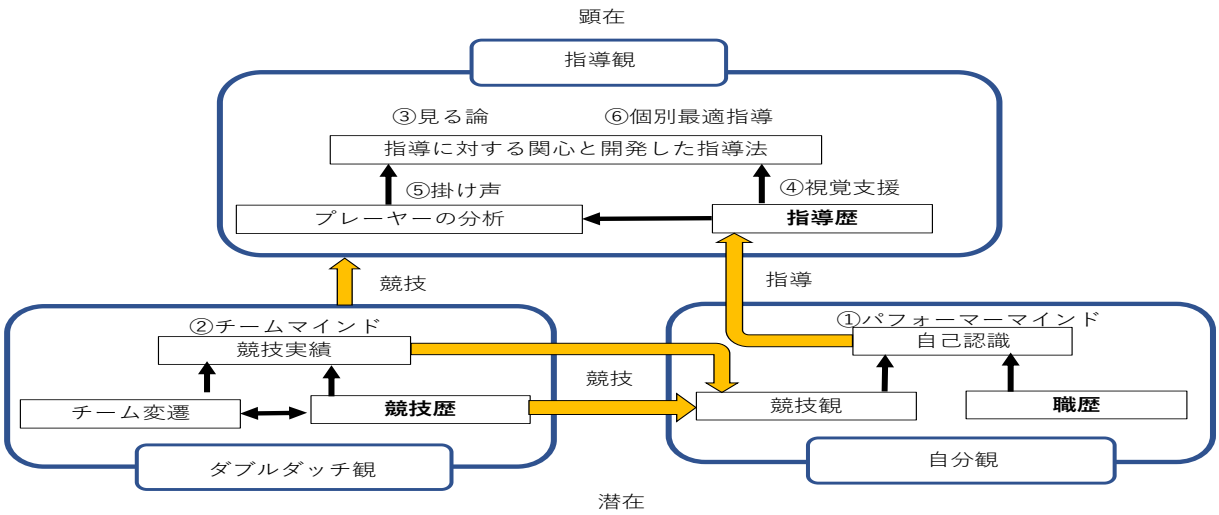

図 2 Y 氏の指導スタイル

4. 結言

4.1. Y 氏の指導スタイルの評価

宗宮ら（2016）はマートン（2013）が示す 3 つのコーチングスタイルに注目し、指導者と選手の関係について論じている。卓越したダンス指導者の指導哲学に関する宗宮の論考は、Y 氏の指導スタイルを検討する上で重要な示唆を含んでいる。なぜなら、ダブルダッチパフォーマンスの構造はダンスパフォーマンスのそれと類似性をもっているからである。そこで、本節でもマートンのコーチングスタイルに注目し、Y 氏の指導スタイルについて検討したい。

Y 氏は自身が創作した構成を提供している。これはマートン（2013）が指摘する命令スタイルの側面をもち、学び手にその教えを吸収させることを主目的とした教え込み的指導と言うことができる。しかし、前述した Y 氏の指導は協調スタイル、すなわち「指導の形が、選手の育成に最適であるかという難しい決断を常にこなしている」（マートン，2013，p.23）という評価に合致するものである。一方で従順スタイルについてマートンは「（指導者は）どうしても必要なときだけ規律問題の解決に協力する」（マートン，2013，P.22）としている。Y 氏は指導過程において小学生チームならではの規律の乱れを正す指導を行っている。しかし、Y 氏の指導は積極的な対象者への関りを基本としているため、従順スタイルには当たらないと考えられる。つまり Y 氏の指導スタイルは外枠として命令スタイルをとりながらも、中核には協調スタイルが位置づいている複合スタイルであると考えられる。Y 氏の指導メソッドの有効性の底流には、協調スタイルにおける個に応じた指導の実現があった。この個に応じた指導を可能にするためには、対象者一人ひとりに対する分析が妥当なものである必要がある。この他者分析力を支えているものは、彼自身の自己分析の正確さにあるといえる。今回のナラティブ生成質問は『ダブルダッチとの出会いから SC が演技を完成させるまでの過程を振り返って、ご自身のライフヒストリーがどのように関わっているのでしょうか』であった。このことから彼の指導哲学に、競技歴と指導歴が現れたのは当然のことであろう。しかし、指導哲学が語られる中に職歴と関連した自己分析が語られていることは注目に値する。つまり、Y 氏の自己分析力の高さが対象者一人ひとりに対して、また、チーム全体に対しての適格な分析につながり、このことが彼の個別最適な指導につながっているのである。

4.2. 研究の成果と課題

佐野（2023）は、学習者をいかに習熟へ導くかについて指導者と研究者の追究の仕方の違いを指摘し、指導者の関りは目の前の学習者の動きの問題を追究する直感的追究であるとしている。また、哲学的な方法論は、「スポーツにおいて運動する人自身が自然にとっている方法」（佐野，2023，p.12）とし、スポーツの暗黙知的側面を認めている。本研究で指導者の指導哲学の生成過程を明らかにしたことは、ダブルダッチ指導者に求められる資質・能力を明示化するための事例の一つにすぎない。しかし、本研究の成果の一つは、実際の指導記録を合わせて具体的

な指導メソッドを抽出したことにより、指導者の指導哲学と指導メソッドからなる明示的な指導スタイルの一つを示せたこと、いま一つは、明示化した指導スタイルを一般的指導者論に照らし合わせて評価できたこと、の二点である。このように、明示化された指導スタイルの評価は、指導者自身が自らの指導を省察する上で確かな根拠となり、このような事例の蓄積によってダブルダッチのみならず、スポーツ一般の指導者に求められる資質・能力が明示化されていくと期待できる。

さらに佐野（2023）は、一人で追究することを基本とする哲学的研究に対して、科学的研究は多くの人が客観的根拠を積み上げていくものであるとしている（佐野，2023，p.11）。このことに鑑みれば、指導者は自身の指導哲学を明示的に捉え、科学的姿勢をもって指導メソッドについて意見交流を行うことも必要であろう。各々の指導哲学、指導メソッドを交流しようとする姿勢は、スポーツ一般においても指導者に求められる資質・能力を明示化する上で、今後検討する価値があると考えられる。

本研究ではダブルダッチ初心者によるチームが短期間でダブルダッチパフォーマンスを完成できた要因に、指導者の職歴・競技歴・指導歴から生成された指導哲学があったことを明らかにした。今や多数のダブルダッチの指導者が全国的にみられるようになった。彼ら／彼女らの中には職業的に自立し、組織的な指導によって大会の上位成績者を輩出するといった具体的成果を収めている者もいる。彼ら／彼女らに対して今回と同様の調査を行った場合、指導者の職歴にダブルダッチスクールが位置づくことになろう。本研究で得た知見によれば、職業としてのダブルダッチと、彼ら／彼女らの競技歴・指導歴には何らかの関連を見出すことができると考えられる。そして、本研究で試みたライフヒストリーに関する語りから指導哲学及び指導メソッドを抽出すること、指導哲学と指導メソッドから導き出した指導スタイルを評価するという方略は、他の指導者に対しても応用可能であろう。

本研究の今後の課題は、ダブルダッチ指導者ひいてはスポーツ一般の指導者に求められる資質・能力を明示化する上での試金石とすることを見据えて、国内のみならず海外指導者を対象とした事例検証を蓄積することにある。

注

1 一般財団法人日本ジャンプロープ連合（2021）.『ACTIVITIES』（https://jjru.sport/jjru/activities/）（2023年12月1）参照

2 意味は、明確に（ハッキリ）である。

引用文献

青山清英（2019）「スポーツ指導者養成機関のスポーツ指導者教育における倫理知と実践知」『教師教育と実践知』第2巻. 54-55

佐野淳（2023）『基礎から学ぶスポーツ運動学』大修館書店

長沼誠（2017）「「コツ」と「カン」に着目した「ダブルダッチ」の指導に関する実践的考察」『教育実践研究』27，156

萩原雄麻（2019）「主体的・対話的・深い学びを実現する創作ダブルダッチ」『女子体育』vol61-2-3，41-45

原祐一（2022）「「ゲーム」としてのスポーツ　―つながる場のデザイン―」『スポーツ社会学研究』30巻 2，25-38

平野真.林恒明（2006）「ダブルダッチにおける技能達成への児童の変容―林マジックの検証を通して―」『スポーツ教育学研究』Vol.26 No.1，41-51

宗宮悠子.寺山由美.會田宏（2016）「卓越したダンス指導者のコーチングフィロソフィーの構造に関する質的研究―18歳以上のダンサーの指導に実績のある指導者に着目して―」『コーチング学研究』29 巻2号，169-180

渡辺敏明（2015）「ダブルダッチの学習指導について考える」『小学校体育ジャーナル』78号，5

Rainer Martens（2013）*Successful coaching*. レイナー・マートン（2013）『スポーツ・コーチング哲学指導理念からフィジカルトレーニングまで』（大森俊夫，山田茂訳）西村書店

A Study on the Competency of Instructors Required for Double Dutch Performance Instruction：Through qualitative and quantitative research on the coaching process

Kazuaki Kitahara
(Okayama University of Science.)

About 40 years have passed since Double Dutch, which originated in the United States, was introduced to Japan, and Double Dutch is now loved by a wide range of age groups, from infants to working adults. During this time, various original technologies have been developed, mainly by university players, and Japan teams have achieved excellent results in various world championships. Needless to say, this phenomenon is supported by Double Dutch instructors from various backgrounds, but there is no discussion of how their teaching methods have been generated.

In this paper, we focused on a case where a beginner-only kids team completed a performance in accordance with the rules of the tournament in a short period of time, and attempted a qualitative analysis of the life history of the coach. As a result of the analysis, it was suggested that the instructor's educational background, work experience, and Double Dutch history were related to generate a unique teaching philosophy, which established a unique teaching method. Furthermore, by extracting teaching methods from teaching philosophies, it became possible to evaluate teaching styles on a general scale. This knowledge is the first step toward obtaining a touchstone for clarifying the qualities and abilities of Double Dutch leaders, which are still in the realm of implicit practice.

Keywords: Double Dutch. competency. coaching philosophy. life history. kids team